View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

若手社会科教師の授業力向上のためのアプローチ

― 校内教師教育者による指導計画等を活かした協議会を通して ―

広島経済大学　胤　森　裕　暢
広島市立国泰寺中学校　重　森　雅　穂
広島市立落合中学校　西　川　知　之

はじめに

本稿では，「入職期」から「中堅期」に入る若手中学校社会科教師が授業力，特に授業を構成する力を，先輩社会科教師であり校内における主要な教師教育者である者（例えば校長）からのどのようなアプローチにより，向上できるかを明らかにしようとする。

学習指導要領改訂などにより，ダイナミックな授業改善が求められる中，教師はだれもが自分の授業構成を見直すなど授業づくり，カリキュラムづくりをしなくてはならない。このように学校現場が大きく変わろうとしている中，若手社会科教師は，大学での学びを基にしつつ，同僚や上司と協働的に，抱える子供たちの実態に応じた実践を通しながら，社会科教師である自分の授業構成についての考え方をつくり上げねばならない[1)]。

では，この緊要な課題を抱えている若手社会科教師に対して，直接的に関与し得る同僚や上司は，校内の教師教育者としていかにアプローチすればよいのか。

これに関しては，主体的・連続的・発展的な授業研究の場と，個別的に指導・助言をするメンター，より具体的には授業モデルを示す等の明確な示唆を与えられる先輩社会科教師とが，重要な意味を持つと考えられる[2)]。

このことから，校内における授業研究，特に研究授業のための研究協議会において，教師教育者であり先輩社会科教師でもある校長が指導・助言を工夫するが，若手社会科教師の授業を構成する力などの授業力形成に重要な役割を果すのではないかと考えられる。

これに関しては，石川による，先輩教師を含む身近な教師教育者による教師の省察を意図的に支援する方法論についての開発的研究がある[3)]。

ここには，メンター（先輩教師）が実践，開発した授業計画書や授業実践記録を加工して「媒体」にすれば，その授業の動機や自らの教科観などについて「私」を主語に開示でき，メンティ（後輩教師）の疑問に当事者として答えることもできると考えられ，メンティとの対話が活性化し，授業に対するメンティの固定観念をゆさぶり，メンティの（だけでなくメンターも）省察が深まり得ることが論じられている。

この方法論を手がかりにすれば，中学校の若手社会科教師の授業をゆさぶり，授業力向上を図れるのではないだろうか。すなわち，校内授業研究を推し進める教師教育者であり，先輩社会科教師でもある校長が，社会科研究授業と研究協議会の場をつくり，若手教師の頃に自作し実践した指導計画や教材のことを主体的に開示しながら，対話的な指導・助言を行えば，若手社会科教師の授業に対する考え方をゆさぶることができ，授業を構成する力など授業力向上につながるのではないか。

その当事者である校長自身の手応え，さらに若手社会科教師のフィードバックまで得ることで，効果的なアプローチの具体例も示せるのではないか。

こうした問題意識から本研究は，2019年度に公立Ａ中学校で，若手社会科教師（Ｘ教諭）の参画を得て，研究当時の同校校長（Ｙ校長）と，研究当時に同校の校内授業研究に年間を通して関与していた社会科教育学研究者（研究者Ｚ）が進めた。

ここで研究者Ｚは，Ｘ教諭の研究授業に直接関与するのを控え，Ｙ校長のアプローチや研究協議会を客観的に整理することとした。

本研究は次の①～④のように進めた。①Ｘ教諭による研究授業及びそのための研究協議会の設定。②研究協議会で，Ｙ校長が若手社会科教師の頃に作成した指導計画をＸ教諭に示しながら研究協議。③Ｘ教諭は，事前の研究協議会を通して指導計画を作成し，研究授業を実施。④事後の研究協議会等で，指導計画を用いてＹ校長が行なった指導・助言には，どのような意味があったか等について研究者Ｚが整理し，明らかにしていく。

1　研究授業のための研究協議会

⑴　研究授業の設定

Ｙ校長がＸ教諭に相談し，次のとおりの研究授業（以下，本研究授業）を同校として引き受け，Ｘ教諭が，校外の別会場で実践することとなった。

第５回中国ブロック中学校社会科教育研究大会（広島大会）・第50回広島県中学校社会科教育研究大会（広島大会）における公開研究授業（公民的分野）
①大会期日：令和元年11月６日（水）
②大会会場：広島市西区民文化センター
③大会主催者：中国ブロック中学校社会科教育研究会・広島県中学校教育研究会社会科部会
④大会研究主題：「『社会的な見方・考え方』を育成する社会科学習の創造～ルーブリックを明確にしたパフォーマンス評価の実践を通して～」

⑵　研究協議会の概要

本研究授業実施のため，Ｙ校長はＸ教諭と，次の①～⑥のとおり研究協議会を行った。(⑤以外はＡ中学校の校長室で２人が対面し実施された。)

①　４月４日（木）に約２分間。年度中にＸ教諭が行う研究授業の日程等の確認。(本研究授業の具体的内容については，ほとんど語られず省略。)

②　４月26日（金）に約25分間。３年生社会科授業（歴史的分野）実践に関する協議。Ｙ校長が観察し気付いたことをもとに，Ｘ教諭が振り返った。

続いて，本研究授業と事前に行う「広島市中学校教育研究会」（以下「市中研」）での模擬授業について協議。協議した本日の社会科授業（歴史的分野）実践を振り返り，本研究授業では単元を貫く問いの設定を目指すことを共有した。また，生徒が問いを作れるよう，「子供たちをきたえないといけない。」ことも語られた。

なおこの研究協議でＹ校長は，予めＸ教諭に渡していた，若手社会科教師であった頃に自作し実践した指導計画と教材（生徒の書き込み有）を示して指導・助言した。ここで紹介されたＹ校長による指導計画及び教材の概要は次の通りである[4]。

①　ねらい：沖縄県の産業の特色を明らかにする。
②　教材：ａ　読み物資料「ひろし君の沖縄旅行記」（自作）
　主人公の中学生が２泊３日の沖縄旅行をした際の日記として作成したもの。主人公が旅行中に見聞したこと，疑問に思ったこと等を記している。
ｂ　学習プリント「社会科＜地理＞プリント」（自作）
　小見出し「テーマ」，「ステップ１　調べてみたいこと・調べ方」，「ステップ２　どうしてそうなるのかと思ったところ」，板書等のノート欄，「よく分かったところ」，「もっと調べてみたいところ」
③　過程：教材を読んだ生徒が問いを設定し解決する。
　個人で疑問を発見・発表→学級で共通課題を設定→教材を活用し個人で思考・判断→学級で討議し解決
④　留意点：生徒が自分たちで問いをつくる（共通課題を設定する）ことにより，解決の必然性や解決への意欲を高めること。

また，この指導計画と教材を用いた指導・助言の語りとその意図は次の通りである。

＜Ｙ校長の語りＡ＞…「それとお，あなたはなかなかＩＣＴなんかも駆使しながら，良いカラーのやつを見せて，子供らがそれをオッとね，（はい。）興味・関心を引いて，良いと思うんじゃけど，例えばその，私が資料渡したじゃない。（はい。）あれの意図っていうのはやっぱり，内発的動機付けなのよ。（はい。）ねえ。だからそのお，仕掛けっていうか，そこをまあダイナミックに考えて欲しいなあと思う訳よ。（はい。）」…　**※（　）内はＸ教諭。**

＜Ｙ校長の語りＡの意図＞　Ｘ教諭は，授業づくりに大変熱心で，毎時間のように，写真やグラフなど，子供の興味・関心を喚起する学習財を準備し，ＩＣＴを活用したりプリントにしたりしながら子供に提示して教科指導を行っている。子供との関係も良好で，毎時間３～４人で構成する学習グループに，問いを解決するための資料を配付し，思考させ導き出した問いの答えをホワイトボードに記入して発表させるスタイルを確立している有望な若手教師である。しかしＸ教諭の指示により，誠実かつ懸命に問いの答えを探す活動に専心する子供の姿を見て，問いに対する必然性や切実性を感得させ，一層主体的に学ぶ授業を構築することの必要性を感じたのも事実である。現在の手法に一石を投じ，授業改善を図ることによりＸ教諭の一層の職能形成を図りたいと考えるに至った。また，当該教諭の問いが資料の読み取りによって解決されることが多く，いわゆる見付け学習からの脱却も必要であると感じられた。そこで，私が教諭の頃の平成５～８年度頃に研究していた授業実践を当該教諭に示し，そこから授業改善へのヒントを得させることにした。

私の授業実践は，社会科の自作教材を子供に提示し，その資料から子供自身が見いだした疑問を，授業の問いにすることによって子供の課題解決への必然性や切実性を強化し，問いの解決を通した主体的な学びを活性化させようとする構成である。

③　６月22日（土）に約10分間。３年生社会科授業の定期試験について協議。Ｙ校長が内容と書きぶりなどについて指導・助言し，Ｘ教諭が応答。途中から，本研究授業について，事前に行う「市中研」模擬授業の見通しについて協議した。大会研究主題にある，ルーブリックを用いたパフォーマンス評価を組み込んだ単元レベルの指導計画を作成する必要性を共有した。

④　６月25日（火）に約８分間。本研究授業の単元指導計画について協議。Ｘ教諭が，すでに担当指導主事とも協議して，イメージしつつある，単元指導計画について，Ｙ校長に口頭で説明した。これに対してＹ校長は，教材となる地元企業（広島電鉄）の取組について，最新の就活動向と連動している気がするという指摘をした。また，生徒がルーブリックをつくる先行的な実践があることも助言した。

⑤　７月26日（金）に市教育センターで，本研究授業のための「市中研」模擬授業と研究協議会が行われた。この時には，担当指導主事から助言が約26分間（省略）。また指導助言者（社会科教育学研究者）から助言が25分間あった（省略）。この時，Ｘ教諭とＹ校長との間で具体的な協議は行われなかった。

⑥　８月１日（木）　約２時間10分　本研究授業の指導計画について具体的な協議。

途中の約20分間に集中して，Ｙ校長は，自作し実践した教材を示しながら，その指導計画について説明し，Ｘ教諭と研究協議を深めている。開示されたＹ校長による教材及び指導計画の概要は次の通りである。

①　ねらい：織田信長の人物像を明らかにする。
②　教材：a　読み物資料「ひろし君の歴史研究」（自作）
　主人公の中学生が織田信長について調査した内容をまとめたもの。戦法，経済や宗教についての施策を中心に構成している。
b　学習プリント「課題発見・課題設定プリント社会科学習プリント《歴史》」（自作）
　小見出し「テーマ」「課題の内容，調査の方法・仮説・課題解決」
c　板書計画「織田信長の人物像」（自作）
　読み物資料を読み取り，抽出するキーワードをイメージマップ化し，中心円に信長像が列記してある。
③　過程：教材を読み，個人が解決できない問いを共通課題に設定し，学級で討議し解決していく。個人で疑問発見→グループで疑問を精査→グループで疑問を発表→学級で共通課題を設定→教材を活用して個人・グループで思考・判断→学級で討議→解決
④　留意点：問いを分類・精査し，「なぜ」という問いを共通課題に設定し，解決への意欲を高めること。

この教材や指導計画を用いた協議の中で，Ｙ校長自身が特に気付きを与えようと指導・助言した語りは次の５カ所（**Ｙ校長の語りａ～ｅ**）である。

またそれぞれの箇所でＹ校長がＸ教諭に，どのような気付きを与えようと意図していたかも示す。

＜Ｙ校長の語りａ＞…「もしもね，う～ん，まあ参考になればと，いつぞやちょっと渡した私の昔のやつを，（ああ。）持ってきたんですよ。（はい。）これは意図としては，子供らが，その，ちょっと公民は見当たらなかったんですが，意図としては子供らが　やっぱり自分らで課題を立てるんだから，（はい。）その，まあ必然性とか，（はい。）そういったものが生まれやすくなって，あのいくという，スタート地点に立てるというメリットが，思うてやってたんですよね。全分野やったんだけど，う～ん，まあちょっと先にそれを紹介するんだけども，だいたい分かると思うけど，どれや，これか，例えばね，（はい。）例えばこんなやつね。これはあの，意図的に，もうちりばめてるんですね。これ読んだ？（はい，ああこれは読んだことあります。）読んだことあるよね。うーん…で，疑問点とか調べてみたいとか，解決してみたいこというのを，子供たちが出してきて，それで，それをもとに授業を構成していくという，流れなんですよね。（はい。）だから単純な子供たちの，「何で？」いうのが，まあちょっと意図的よ，ではあるけど，子供たちが，『えっ，何でなんかなあ。』というのが出てくるわけですよ。さっきので言うたら，『何でなんかなあは，何で広電は10年も前にこんなことをやったんだろう。』というのがあるよねえ。（はい。）なんかその，子供たちの単純な疑問から，この授業が作れんかなあというのを，ずうっと思うて。」…

＜Ｙ校長の語りａの意図＞　子供が自ら問いを立て，必然性や切実性をもって追究する学習過程を成立させるために，意図的に子供の知的好奇心，疑問を掻き立てる素材をちりばめた自作の読み物資料が必要である。その有効性について説明した。

＜Ｙ校長の語りｂ＞…「う～ん，なんかこう，ヒントにならんかなあと思って。これ，生の資料だからとっても良いよね。（はい。）これを加工するいうのは考えんか。」‥（新聞資料って，…。消すぐらいはできますけれど。）「そうだよねえ。なかなか，そうかあ，そうよのお。なかなか，そっかあ。うーん，まあ，ついでに言うと，（はい）子供らがこういうのに書くんよ。（はい。）まあこの子は，『サンゴがどうやって生えるのか。』非常にこれは単純なんよね。何でかと思うたことをこれだけ挙げて，ここまで来るのに相当，練習したんよ。練習はしたんだけど。まあ結局，何で第一次産業がふるわんのんかのおとか，何で第二次産業もふるわんのんかのおと，まあそういう，これ何や，何でアメリカ軍の基地があるんかなあと，何かまあそういうものなんだけどね。それでその事象が何で起こるかなあというのを，その理由を考えていって，最終的にこれは沖縄だったけど，というものはこういう観光中心の，あの第３次産業の都道府県なんだというまとめをして終わるという流れなんで，あのけっこうやっぱり子供たちは自分たちが，その自分たちが疑問に思っていたことが解き明かされていき，その自分たちが考えたことが，課題として設定されるので，一生懸命やるんよね。」…　**※下線は次の②のア，イを参照。**

＜Ｙ校長の語りｂの意図＞　新聞記事などの資料をそのまま教材として提示することはとても重要なことである。しかし難解であったり，分量が多すぎたり，不要な箇所があったりするなど，学習が未消化になることがある。子供の発達段階を踏まえ，適切に取捨選択し与えることが大切である。興味・関心が喚起され挑戦したくなる切実な課題を子供に設定させるには，意図的に作成した自作教材が有効である。そこで地理的分野の実践を説明しながら，子供が立てた課題について説明した。子供は，自分が立てた課題に学級全体で挑み，それが解き明かされることに喜びを感じ，一層主体性をもって学びに向かうことを説明した。

＜Ｙ校長の語りｃ＞…「これは信長。もう25，6，７年ぐらい前のものだから，古いけどね…。（あ　あはい），書いて。（はい。）これまっさらだけどね。課題を子供たちから出てきた課題を，まとめたのかな，で板書計画。（はい。）まあそういう形で，これだったら４つぐらいの事象から，一つのまとめに持って行って。まあ今やってるのと一緒よねえ。（はい）いまの振り返りシート一緒なんだけど。もうだから，25年，四半世紀から，同じことをやっているということだけどね。」…

＜Ｙ校長の語りｃの意図＞　歴史的分野の実践について説明した。課題発見・課題設定プリントを示しながら，一人一人の子供が抱く疑問をどのようにして学級全体の課題にしていくか，いかに授業を構成したかを説明したものである。

＜Ｙ校長の語りｄ＞…「ただ，公民は何ぼ探しても見つからなかったんじゃけど。記憶の中でね，（はい。）こういうまあ，意図的な文章よね，意図的な文章を作った時の印象があるけど，グラフとか，表とか，そういう，まあ新聞とか，そういうものを提示して，そこから疑問点とか出させたこともあるよね。もちろん新聞を加工したこともある（ああ。）読めないから。」（ああっ，なるほど。）「難しすぎて。うん。これを見たときもそれを思い出したんよ。私は教員の時に，子供らにね，あの，言いよったんがね，公民を勉強したら，新聞が読めるようになりますいうて，当時，中３になった子供たちに，そういって言いよった。まだよく読めないので，あのお，加工したことがあった。もっと見やすくね。ただ本物が良いのは間違いないね。このメリットは繰り返し言うように必然性とか切実性とかそういうものが生まれてきて，活性化するというか，必死になってみんな考えてくれるというのが，とっても，良かったよね。もし，なんかヒントになればね，子供たちが資料に触れたときに，資料に触れたときに，どうしてこれこうなっとるんじゃろうかとか，そういうようなことを思うはずなんで，それが，何かこう，何かこう取り扱われんかなあというのが思わんことはなくってね。せっかく地元の，地元の，ひょっとすると，子供たちの保護者の中には広電勤めとる人がおるかもしれん。（あーたしかに）うーん，ああそうだったんか，家族が勤めとる会社ってそうじゃったんかって思うかもしれん。それを題材にする，非常に良い教材なので，何かこう，何とかならなんかのおって。」‥

※下線は次の②ウを参照。

＜Ｙ校長の語りｄの意図＞　公民的分野の実践について，当時の資料が散逸し，教諭に具体に示せなかったものの，この分野を指導する際の基本的な授業者の構えについて説明した。発達段階に応じて加工した教材により，子供の学習が活性化することを述べた。

＜Ｙ校長の語りｅ＞…「あの，何か，私の考えるのにね，資料はできるだけ単純な方が良くて，要するに今その，例えば，その文章いうのは，ある意味，答え。（そうですね。）じゃけえ私は，その現象，事象を子どもたちに提示して，子どもたちが何でかのお，この考え方，賛成じゃあ，とか反対じゃあでも良いし，おかしいのおでも良いし，そういう疑問をもって，じゃあ何でなんじゃろうか，何でそのせいなんじゃろう，何で反対なんじゃろうとか，何でどっちでもないんじゃろうか，とかいうのを考えていくことに意味があって，その答えがこうあって，あっちこっちにちりばめられとったら，結局はみつけ学習になってしまう。（ああ。）よねえ。そのお，考えたことにならんのじゃないかな。で，うーん，よくやってたのは，（はい。）あのお，データだけを示してさ，（はい。）最後に子どもたちがわーっと意見を言うた後で，実はねこの記事には続きがあってね（うーん），こんなことを言うてる人もいるよ，とかいうのはやったことがある。（あーっ。）うーん，出来るだけその，エッセンスだけを，あの，示して子供たちに何かこう，頭の中に不具合をおこさせるというか，矛盾を起こせるというかね（うんうん），うーん，いう方が面白い授業にはなるよね。うーん。」‥

※下線は次の②のエを参照。

＜Ｙ校長の語りｅの意図＞　子供に必然性や切実性をもたせるための自作教材の作成のための基本的な考え方について言及した。

(3)　研究協議会での語りによるＸ教諭の気付き

これまでみてきた，自らの指導計画及び教材を用いたＹ校長による指導・助言（語り）の中で，Ｘ教諭自身が特に気付きを得られたと考えたのは，次のア～エの箇所（既述の**＜Ｙ校長の語り＞**の中で下線を付した箇所。）である。それぞれの箇所において，Ｘ教諭がどのような気付きを得られたかも示す。

ア　〈Ｘ教諭が気付きを得られた語りの箇所ア〉

…「『サンゴがどうやって生えるのか。』非常にこれは単純なんよね。何でかのと思うたことをこれだけあげて。ここまで来るのに相当，練習した」…**（Ｙ校長の語りｂ）**

〈箇所アの語りからＸ教諭が得られた気付き〉

今まで個人で考える，グループで考える，文章を書かせる等の活動をしてきた。担当学年の生徒が良くも悪くも指示を出す前から，今日の活動への動きを始めるようになったのは，生徒自身の成長だけでなく，今までやってきたことの積み重ねがあったことを確認できた。また改善も積み重ねていく必要があることを確認できた。

イ　〈Ｘ教諭が気付きを得られた語りの箇所イ〉

…「自分たちが疑問に思っていたことが解き明かされていき，自分たちが考えたことが，課題として設定されるので，一生懸命やるんよね。」…
（Ｙ校長の語りｂ）

〈箇所イの語りからＸ教諭が得られた気付き〉

今回の指導計画に生かすことはできなかったが，生徒が疑問に思った「なぜ？」という思いが一番，意欲につながること，そして生徒自身の「なぜ？」という疑問そのものを学習課題にできれば，生徒の意欲を一番良く引き出せることを学べた。

ウ　〈Ｘ教諭が気付きを得られた語りの箇所ウ〉

…「(資料を）加工したことがあった。もっとみやすくね。ただ本物が良いのは間違いないね。このメリットは繰り返し言うように，必然性とか切実性とかそういうものが生まれてきて，本当，　活性化するというか,」…
（Ｙ校長の語りｄ）

〈箇所ウの語りからＸ教諭が得られた気付き〉

本物の資料の大切さを改めて確認できたとともに，本物にこだわりすぎて，生徒の実情に合わせることをないがしろにしていたことに気づくことができた。

エ　〈Ｘ教諭が気付きを得られた語りの箇所エ〉

…「子供たちに何かこう，頭の中に不具合を起こさせるというか，矛盾を起せるというかね，う～ん，いう方が面白い授業にはなるよね。」…
（Ｙ校長の語りｅ）

〈箇所エの語りから得られた気付き〉

自身の体験からも，生徒が興味を示す瞬間は，「なんで？なんでそうなるん。」という反応がある時であった。そのため興味を持たすこと，その興味を授業の中で活かし，活動に向かわせることが大切であるということに気づくことができた。

2　Ｘ教諭とＹ校長による研究協議会を通して作られた指導計画

既述したＹ校長との研究協議会（「市中研」の模擬授業・研究協議会を含む）を通して，Ｘ教諭が作成した本研究授業の指導計画は次の表１の通りである。

表１　本研究授業の指導計画

(1)　単元名「生産と労働」（公民的分野）
(2)　本単元の目標 個人の企業の経済活動における役割と責任を理解し，雇用と労働条件の改善について考察し，自分の意見を表現できる。
(3)　単元の評価（パフォーマンス評価） レポートの記入内容による ①　単元のパフォーマンス課題 現代社会の少子高齢化にともなう労働人口の減少・労働力不足という課題と解決策，障がい者・高齢者・女性など採用や昇進で不利な扱いを受ける人々がいる課題と解決策を考えることで，現在の日本の雇用と労働条件の改善について自分の意見を表現できる。 ②　単元のパフォーマンス課題の評価規準（省略）
(4)　本時の目標 日本の契約社員や労働人口の実態を踏まえて，正社員化し同一労働同一賃金とする長所と短所を説明できる。
(5)　本時の主な学習内容 会社（広島電鉄）が契約社員を正社員化した意図を経済の動きを踏まえて考える。
(6)　本時の評価 ワークシートの記入内容による ①　本時のパフォーマンス課題 ワークシートに自分の意見を記入する。 ②　本時のパフォーマンス課題の評価規準 日本の契約社員や労働人口の実態を踏まえて，正社員化し同一労働同一賃金とすることの長所と短所をプリントに記入できている。
(7)　本時の学習過程 ①　前時の復習をしてから，（教科書にも載っている）新聞記事の見出しを一部覆って示し，広島電鉄がどのような取り組みを行ったのか予想する。 ②　本時のめあてを提示する。 めあて：なぜ広島電鉄は契約社員を正社員化したか説明できる。 ③　契約社員とはどのような立場の人か教科書の内容を確認する。 ④　関連する別の新聞記事から，広島電鉄の正社員や契約社員の立場がどのように変化したか読み取る。

⑤　記事から読み取った内容から疑問点を挙げさせる。
疑問例：なぜ広島電鉄は，人件費が上がるにも関わらず，全員を正社員にしようと考えたのだろうか。
⑥　広島電鉄が新聞記事のような取り組みをした理由について資料を踏まえて考える。
⑦　考えた内容を発表する。
⑧　本時を振り返り，まとめを行う。
まとめ例：現在の契約社員が多い社会の現状と労働人口の現象を踏まえて，正社員化し雇用の安定や賃金を保障することで人材を確保しようとしている。

「⑺本時の学習過程」に着目すると，その①，②で地元企業が契約社員を正社員化したという新聞記事を取り上げ，前時の学習内容と逆の事象であることを活かし，「なぜ？」と生徒の「頭の中に不具合」，疑問が起きるよう工夫している。一つ目の記事は，「生徒の実情に合わせ」興味を抱くよう見出しを加工し，二つ目の記事は，④で興味を抱いた生徒が読み込む「必然性とか切実性」のあるものを探し出し，本時で必要な箇所を拡大して，生徒がよく情報を取り出せるよう工夫している。

3　Ｙ校長の指導計画等を用いた研究協議会の意味

⑴　Ｘ教諭が理解した研究協議会の意味

研究協議会で，Ｙ校長がかつて実践した指導計画や教材をもとに，指導・助言を受けていた意味について，Ｘ教諭の理解は次の通りである。

社会科授業での様々なアイディアに対する生徒の反応や取り組みにかかる時間など，経験に基づいた予測とアドバイス，さらに実践された授業プリント（生徒の記入内容も有）をいただくことができた。この結果，自分が実践する前に，生徒の姿をより具体的に予測し，シミュレーションを重ねることができた。授業づくりの中で，時間配分や資料の内容などについて再考する際に大きな糧となった。また，自分以外の視点で授業の内容を検討していただく事で，自分自身が見落としていた面，あいまいにしてしまっていた面などを指摘していただき，より深く自分の授業について考えることができた。

⑵　Ｙ校長が理解した研究協議会の意味

このＸ教諭の理解も踏まえ，Ｙ校長が理解している研究協議会での語りの意味は次の通りである。

わたしの過去の実践を用いて指導・助言した内容について改めて述べると，**Ｙ校長の語りａ**は，教諭であった時分の実践の概要及び意図に触れ，Ｘ教諭の指導案に応用できないか言及したものである。（Ｘ教諭は，関心を示したものの，注目した箇所としてはあげていなかった。）わたしの過去の実践については，Ｘ教諭が指導案を作成する数か月前に，実践資料のコピーを手交していたが，内容の詳細な説明はしていなかった。本実践は子供自身が問いを立て，必然性や切実性をもって解決に挑むことのできるものであり，Ｘ教諭が指導案を構想する前であった，手交の時点でその有効性を実感できるよう説明すべきあった。

Ｙ校長の語りｂは，地理的分野の自作教材について説明したものである。Ｘ教諭が気付きを得られた箇所を２つあげている。１つは，子供を学習集団として鍛えていく必要感を高めてもらえた。いま１つは，子供に「なぜ？」という疑問をもたせ，それを学習課題として設定することができれば，学習意欲を引き出し，学習の活性化につなげることができるということを理解してもらうことができた。

Ｙ校長の語りｃは，歴史的分野の自作教材について説明したものである。ここでは，子供の発達段階に応じた教材を作成することの有効性について感得させることができた。

Ｙ校長の語りｄは，自作教材自体は散逸しているものの，公民的分野の実践について説明したものである。Ｘ教諭も社会科実践の中で，子供が「なぜ？」という問いに関心を高めることを経験的に知っており，改めて，子供の既成概念に不具合を起こさせることの大切さを感じてくれたようである。

Ｙ校長の語りｅは，示した実践資料に関連する説明である。（Ｘ教諭も注目した箇所にあげていた。（なお11月１日（金），当該教諭が中国ブロック中学校社会科教育研究大会で行う研究授

業について協議した際，当該教諭は子供の関心をより高めるために，子供に示す資料を再構成することを決めた。）

わたしは当時，社会科の宿痾（しゅくあ）と言われていた知識伝達型の指導の在り方から脱却する手立てになり得ると考え，この実践を「平成６年度広島市学校教職員実践研究」としてまとめ提出し一定の評価を得た。当該教諭に対し，本実践の有効性について，子供の変容等も見て取れるよう，もっと豊富に資料を示しながら，時間をかけ丁寧に説明すべきだったと実感している。

⑶　研究者Ｚが客観的に理解した研究協議会の意味

Ｘ教諭の理解，それを踏まえたＹ校長の理解を受けて，研究者Ｚが，客観的に理解した本研究協議会の意味は次の点である。

まず，一貫して自校の生徒の学習状況，興味や意欲，成長に着目していた研究協議で，Ｘ教諭は生徒の学習改善につながる気づきを，Ｙ校長の指導計画等を通した指導・助言から得ていた。このことから，校内教師教育者である校長が自作し実践した指導計画等を，自校の生徒の学習や授業に係る若手教師との協議で活用し得ると考えられる。

次に，自身の指導計画等を用いたＹ校長の指導・助言で，Ｘ教諭が注目したのは，自らの実践体験と重なり，直面している研究授業づくりに役立つと自覚した点であった。具体的には，再確認できたこと，意識化できたこと，見通しが持てたことが気付きや役立ったこととしてあげられた。このことから，校内教師教育者が自身の指導計画等を開示するとともに，若手教師の実践体験や切実な課題があることで，気付きが生じると考えられる。

他にＸ教諭は触れていないが，Ｙ校長は，本研究協議会に先立ち手渡した指導計画や教材を渡す時，その有効性や意図などを丁寧に説明すればよかったと繰り返し述べ自省している。指導計画等には，若手教師の気付きを促し授業力向上へつなぐこと，校内教師教育者が意味を語り自省すること等，よりよい活かし方が未だあると考えられる。

⑷　Ｙ校長による指導計画等を用いた研究協議会の意味と構造

Ｘ教諭とＹ校長，さらに研究者Ｚがそれぞれ理解してきた本研究協議会の意味を改めてまとめると次のようになると考えられる。

この一連の研究協議会は，急を要するＸ教諭の研究授業に向かい行われたのであり，Ｙ校長から実践して効果のあった自作の指導計画及び教材が，その研究授業をつくる手がかりとして開示される中，Ｘ教諭が，生徒の学習に結びつくと気付いたことを活用して研究授業の指導計画の具体的改善につなげている。すなわち建設的な協議が進められていたと考えられる。

若手教師には研究授業のために指導計画を作成するという切実性があり，両者が対面する研究協議会の場があり，そこで校内教師教育者による指導計画等の有効性が開示されることにより，対話的な協議が可能となると考えることができる。

なおＹ校長による指導計画を用いた指導・助言の中で，Ｘ教諭が気づきを得て手がかりにしていた内容は，既に示したように，自らの授業体験と重なることや，喫緊の研究授業のための指導計画改善に明らかに有用と考えられることであった。

このことに関連してＹ校長は，Ｘ教諭の授業実践をアセスメントする必要性，そして自身の指導計画を早くから手渡した際に，もっと丁寧な紹介，意味についてよく伝えた方が良かったと反省している。自作の指導計画等の渡し方，伝え方を工夫することにより，自分なりの授業構成を生みつつあるＸ教諭と意味深い協議ができ，よりよい理解を得て，さらに気付きを促し成長へつながる可能性があると考えられる。

これらから，校内で若手社会科教師の主たる教師教育者となる校長が，自らの授業実践を活用するアプローチをさらに充実させるには，当該若手教師の授業実践，特にその授業構成の力についてアセスメントを行い，若手教師が実践している授業の特質をよく理解してから，その授業構成をゆさぶり高めるために，自身の指導計画等についてよく理解してもらえるよう，継続して対話的な協議を営んでいくことに意味があると考えられる。

これらの意味，本アプローチの抱えている課題を含め，自身の指導計画等を活かした校内教教育者による本アプローチの構造をイメージ図にすれば次の図１のようになる。

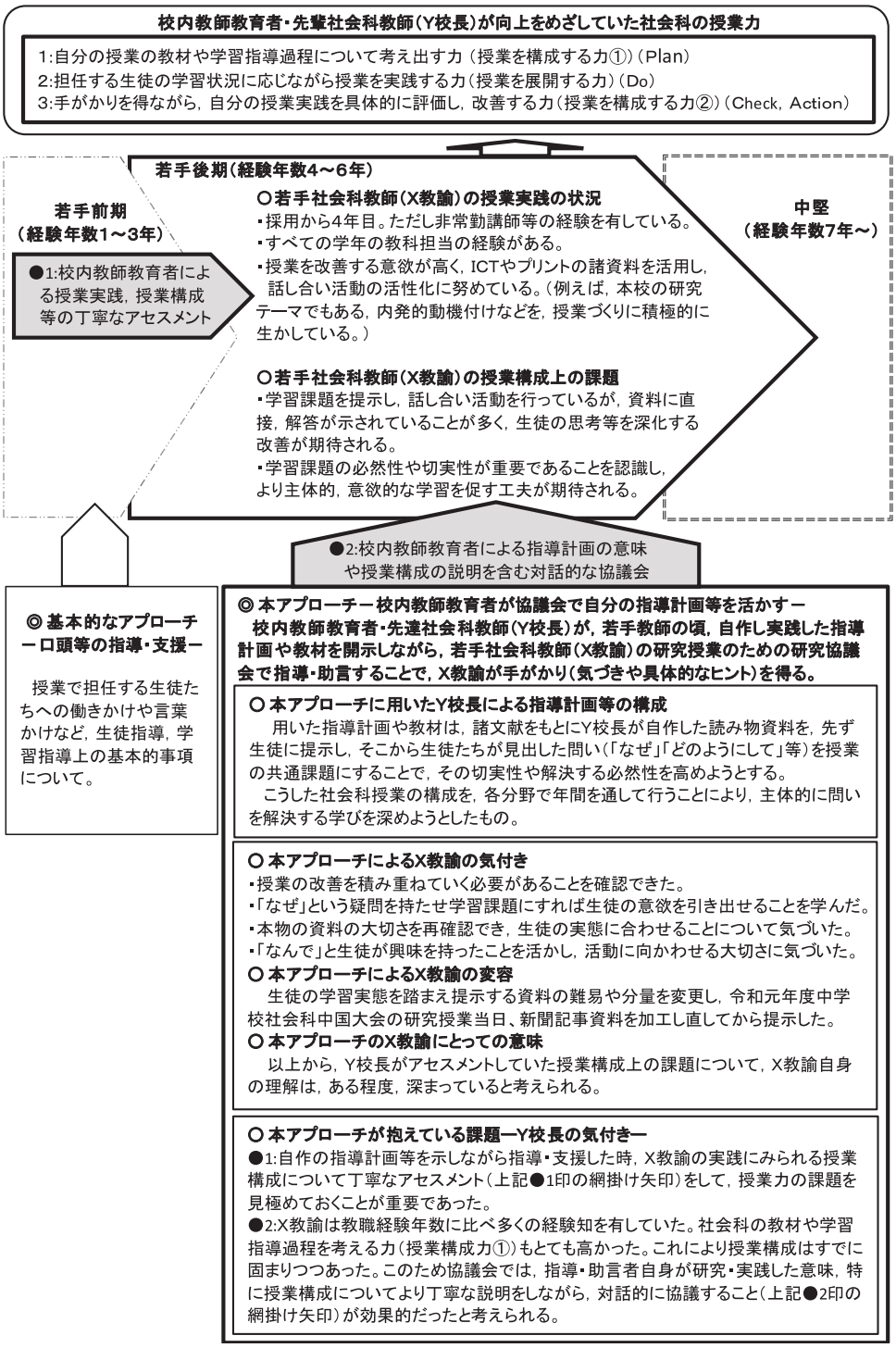

図１　若手社会科教師の授業力向上のための校内教師教育による本アプローチのイメージ図

おわりに

⑴　本研究の成果

成果は次の２点である。１点目は，若手社会科教師の授業力（特に授業を構成する力）を向上するために，先輩社会科教師であり，校内における主要な教師教育者でもある校長が，若手教師の研究授業における研究協議会で，自身による指導計画等を開示しながら対話的な指導・助言を行うことに重要な意味があることを，アプローチする側の校長の語りや反省だけでなく，若手教師の語りや振り返りも得ながら明らかにした。

２点目は，指導計画を活用して対話的な研究協議会を行っていた本事例について，若手社会科教師の授業力向上のための校内教師教育者としての同校校長によるアプローチのイメージを図化した。

⑵　残された課題

残された課題は次の２点である。１点目は，若手社会科教師の実践的かつ研究的な課題についてどのようにアセスメントし，同校校長が自身の授業を，いつ頃どのように示せば，より当該教師の授業改善に役立つ（改善への内発的な動機付けを高められる）のかという，アプローチの視点や方法をより明確にすることである。このために，特に校長の省察をよくふまえて，別の若手社会科教師にアプローチしてみることも重要と考える。

２点目は，若手社会科教師が向上する必要のある授業力として，授業を構成する力の他にどのような要素があり，それらはどう関連しているのか，さらに「中堅期」以降の社会科授業力の向上にどうつながってゆくかについて明らかにしていくことである。

本稿では，若手社会科教師が向上する必要がある授業力についてひとまず，生徒に学習させたい内容と方法を自ら構成する力が重要と仮定して，アプローチの仕方を探ってきた。図案にも，われわれが仮定してきた若手社会科教師に必要と考える授業構成の力を示した。これらの仮説に基づいて，指導計画を活用したアプローチを積み重ねていく中から，授業構成の力の内容や他の要素との関連性について明らかにしていくことが重要と考える。

註

1)　森分孝治「社会科教師の資質と専門性」教員養成大学・学部教官研究集会社会科教育部会編『社会科教育の理論と実践』東洋館出版社，1988年，pp. 50-55。米田豊「社会科教員の授業力―教育現場の現状と教職大学院の実践から―」『社会科教育研究』№.110，2010年，pp. 6, 8。胤森裕暢「地理歴史科・公民科教師による授業づくりを改善する研修の視点」『社会認識教育学研究』第31号，2016年，p. 8 参照。

2)　胤森，同上論文，p. 9．胤森裕暢・田中泉「入職期における中学校社会科教師の職能発達に関する研究」『広島経済大学研究論集』第40巻第２号，2017年，p. 50 参照。

3)　石川照子「社会科教師教育のためのメンタリングの方法論の開発―日本史教師の省察支援の場合―」『社会科研究』第89号, 2018年, pp. 1-12 参照。

4)　教材の読み物資料は，主人公（中学生のひろし君）が興味や疑問を持ったこと，調査したことが，「ぼく」を主語に，常体でまとめられている。

参考文献

岩川直樹「２節　教職におけるメンタリング」稲垣忠彦，久冨善之編『日本の教師文化』東京大学出版会，1994年，pp. 98-99，pp. 102-105。

森分孝治編著『社会科教育学研究　方法論的アプローチ入門』明治図書，1999年。

渡邉巧「日米における社会科教師教育研究の発展と課題―研究対象として教師教育を捉える―」『社会科教育論叢』第50集, 2017年，pp. 91-100。

附記

本稿は，全国社会科教育学会「平成31年度研究推進プロジェクト事業」に採択された，グループ「社会科教師の力量形成に校内の教師教育者はいかにアプローチすればよいか」による研究成果を踏まえたものである。